

北イタリアのまちづくり事例に学ぶ 公共空間活用の重要性



社会研究部 上席研究員 篠原 二三夫
fshino@nli-research.co.jp

※本稿は2016年3月「基礎研レポート」2本
をまとめ、加筆・修正したものである。

1—はじめに

一昨年(2015年)の2月7日から2月19日にかけて、北イタリアのフィレンツェ、ボローニャ、フェラーラ、ヴェネツィア(本島及びメストレ地区)、ヴィアレージョなどの5都市を訪問し、各都市のまちづくりにおいて、どのように公共空間が活用されているのかを調査する機会を得た。本稿では、フィレンツェの光による公共空間の演出事例および創造都市ボローニャにおける中心市街地活性化のための公共空間への取り組み事例について報告する。

ここで言う公共空間の多くは道路や歩道、広場、そして数多い都市部の歴史的遺産である。フランスやスペインなどと同様に、イタリアの市街地を歩くと、オープンカフェが並び、広場ではマルシェ(市場)や催し物に出くわす。このように公共空間がうまく活用されておれば、まちの随所に活気が生まれる。しかし、このような公共空間の商業的利用に際して、旧市街地に多い歴史的遺産の価値が損なわれることはないように配慮され、街並みの景観が歪められることはない。

また、日本に次いで高齢化が進むイタリアにも空店舗や空地は多く、その再利用は大きな課題である。再利用者が定着することが鍵なので、徐々にしか地域への経済的効果は生じないが、再利用が進めば、店舗等が面する道路や広場には人々が集うようになる。こうした空店舗等の再利用をうながすことも、公共空間の活用と表裏一体なので、ボローニャで聴取した事例を報告する。

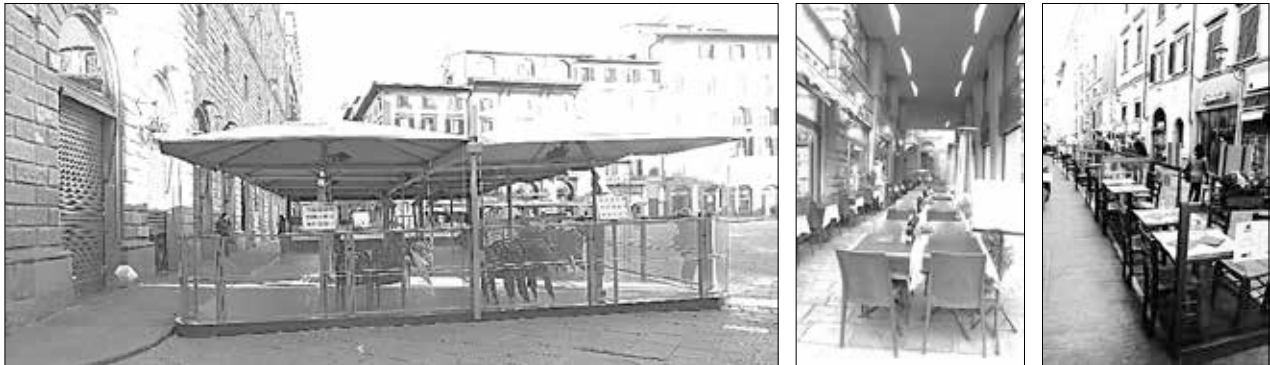
既成市街地の大規模な再開発などによらずとも、既存の公共空間を当初の目的以外にも弾力的かつ多様に活用し、市民と事業者、公共の三者がより大きな便益を得られるような「可変的利用」⁽¹⁾を推進することによって、街区や都市の魅力が高まり賑わいが生まれる。北イタリアでは、こうした公共空間を利用したまちづくり事例を数多くみることができた。

わが国では、国レベルでは都市再生整備計画の区域内において特例道路占用区域を設け、オープンカフェや景観に配慮した質の高い広告塔などの配置が始まっている。地方公共団体では、神戸市などが「協定道路制度」を設け、地域団体がオープンカフェや休息ベンチ・飾花を設置できるよう

(1)「可変的利用」については、国土交通政策研究所報の第56号(2015年春期)に、国内調査と海外調査の速報が掲載されているので、是非ともご参照いただきたい

にしている。東京都では「しゃれた街並みづくり推進条例」における「まちづくり団体の登録制度」を通じて、公開空地等において、オープンカフェや有料イベント、市場などを開催することもできる。その他、全国各地においても同様な動きが出始めていることから、本報告が何らかの参考となり、日本における公共空間の活用に役立つことができれば幸いである。

図1 フィレンツェ・シニョリーア広場やガレリア下歩道上、小路などのオープンカフェ



(資料) 筆者撮影。朝の撮影のため、まだ人通りがなく残念である。

2—フィレンツェの魅力高める光の演出

フィレンツェ市はイタリア共和国中部の北西側にあるトスカーナ州の州都であり、人口規模は国内第8位で約36万人である（第1位のローマは人口約260万人）。15世紀のフィレンツェはルネサンス文化の中心地として栄え、旧市街地は「フィレンツェ歴史地区」としてユネスコの世界遺産に登録されているが、80年代に約45万人だった市の人口は既に20%も減少している。

歴史的遺産の保全が義務づけられているフィレンツェでは、地区再開発などの事業は旧市街地では難しい。そこで、EUにおける都市間競争の中で、都市としての魅力を維持し高める方策の1つとして、公共空間や歴史的遺産を光によって演出する「フィレンツェ・光の芸術祭」(Firenze Light Festival: F-Light)が2011年から企画され、毎年12月上旬から1月中旬にかけて行われてきた⁽²⁾。

日本でも、札幌や仙台、新潟、丸の内中通りや表参道のイルミネーション、神戸のルミナリエなど各地で著名な大規模イルミネーション事業が実施されている。LEDが普及し利用が安価になったこともあり、市町村や商工会レベルでも、今や季節になると、イルミネーションやプロジェクション・マッピング事業を随所でみることができる。

しかし、2011年以降のF-Light事業は、日本の商業地の特定の区画を中心とした演出と比べると、旧市街地の歴史的遺産を軸とするイベントと連携しながら市内全域の公共照明網と連担し、フィレンツェ全市全域を多様で品格ある光りに満たしている点に大きな違いがある。これを実現しているのが、フィレンツェ市内の公共照明のすべての維持管理や運営を行っている民間会社の形態をもつ準公共機関のSocietà Illuminazione Firenze (Silfi)社とフィレンツェ市である。著名なアート・ディレクターを起用し統合的なコンセプトを掲げてマネージさせるとともに、民間のスポンサーを得て、強いリーダーシップを発揮し事業を企画運営している。以下、具体的な事業運営について報告する。

(2) 従来からも小規模の光のイベントが行われていたが、LEDの普及や照明芸術の確立によって、新たな企画で2011年からF-Light事業が始動している。F-Light事業の詳細については<http://www.lightfirenze.it/>を参照。

図2 Firenze Light Festival 2015 in Viaggio Conaluce のウェブページより



(資料) <http://www.flightfirenze.it/> より転載。左は市庁舎よりフィレンツェのドゥワーモ方向、右は市庁舎より見た市内の照明景観。

1. 事業主体

フィレンツェ市とともに共催し、実質的に事業を推進しているのは、Silfi 社である。同社は、市が 30%、ラベンナの民間実業家である Pierco Branzanti 氏が 70%の株式を保有している民間会社である。同社の 2013 年の決算書によると、市内の公共照明等の通常事業と F-Light 事業等による利益は 250 万ユーロである。配当総額は 90 万ユーロなので、市には 27 万ユーロの配当収入が入っている。

Silfi 社は民間会社であるが、市全域の街路灯やアルノ川・広場・歴史的資産のライトアップなど景観照明のすべての点灯・消灯の管理や維持、更新を請け負っている。さらに、新たな照明機器の開発や照明システムの開発を通じて、駐車場等の施設の案内や空き情報案内版などの電光掲示板、電気自動車の充電設備とともに、街頭の各種監視カメラ (CCTV) の設置・管理も行っている。

市の照明や信号、監視カメラに至る電気機器関係のすべてを民間会社 1 社が受託することは日本では考えにくいだが、この背景には、Silfi 社の 70%出資者である Branzanti 氏がかつてフィレンツェ市内を流れるアルノ川の氾濫による洪水で壊滅的な打撃を受けた公共照明システムの復旧と新技術の導入のために多大な資金援助を行い貢献した事情がある。同氏は「フィレンツェ市の光の父」と呼ばれ、市からギルドの称号を授与されている。

図3 アルノ川付近の照明による景観



図4 シニョリーア広場のネプチューン像



(資料) 図3及び4は共に Silfi 社のプレゼン資料 “City of Florence, Temporary Use of Public Space for Lighting”による。

図5 アルノ川ヴェッキオ橋の照明による景観



図6 ヴェッキオ橋のプロジェクション・マッピング



(資料) 図5及び6は共に F-Light 2015 資料による。図4は著名の現代アーティスト・ビデオデザイナーである Stefano Fake 氏による Fake Factory が実施した、ヴェッキオ橋へのプロジェクション (ビデオ)・マッピングの一角である。

2. 対象公共物

市内すべての公共物 (道路、歩道、広場、橋梁、河川等の公物および民間建築や歴史的遺産等を含む)。

3. 事業概要

(1) 背景

フィレンツェ市では人口が減少するとともに観光収入も伸び悩んでいるが、旧市街地では再開発などによる思い切った振興策はとれないことから、何らかの施策を講じ、新たな魅力を創出する必要があった。

(2) 事業スキーム

Silfi 社は公共照明を担当する市交通局や経済観光開発局、情報・メディア局と連携し、特に技術面を担当している。同社は芸術面からの要請通りに光を演出できる専門的あるいは職人とも言える照明技術者を擁しており、Silfi 社の存在意義を一段と高めている。Silfi 社に対する市の支援は、通常、公共空間を所定の目的以外のために利用する場合に課せられる占有料を、この事業では公共性を重視して課さないことである。

市の各局の役割は次の通りである。市交通局は、Silfi社による公共照明の時限的活用を認可する。経済観光開発局は、公共空間の時限的空間利用に関する認可を行うとともに、個々のイベント及び市内全域事業における芸術性を調和させるアート・ディレクションを担当する。このために、一貫したコンセプトに基づき全事業をマネージする専門家を起用⁽³⁾するとともに、スポンサーによるイベントへの資金調達を担当する。情報・メディア局は、これらの動きを逐一広報するとともに、事業実施に係る最終報告書作成を担当する。

(3) 事業内容

芸術性や社会性、観光促進、今後のビジネス展開を念頭に、市内全域の道路や歩道、広場、歴史的遺産などの公共空間を活用し、照明による演出やプロジェクション・マッピングによるアートパフォーマンスを実施する。

具体的には、シニョリーア広場 (8,000 m²)、サント・スプリト広場 (5,000 m²)、サンタ・マリ

(3) F-Light 2015 では、フィレンツェやルカ、プラトー、ボローニャ、ミラノ、ベニス、パリ、リヨン、ルクセンブルグなどにおける芸術祭・展示会・イベント等のマネージメントで著名な Sergio Risaliti 氏をアート・ディレクターに起用している。

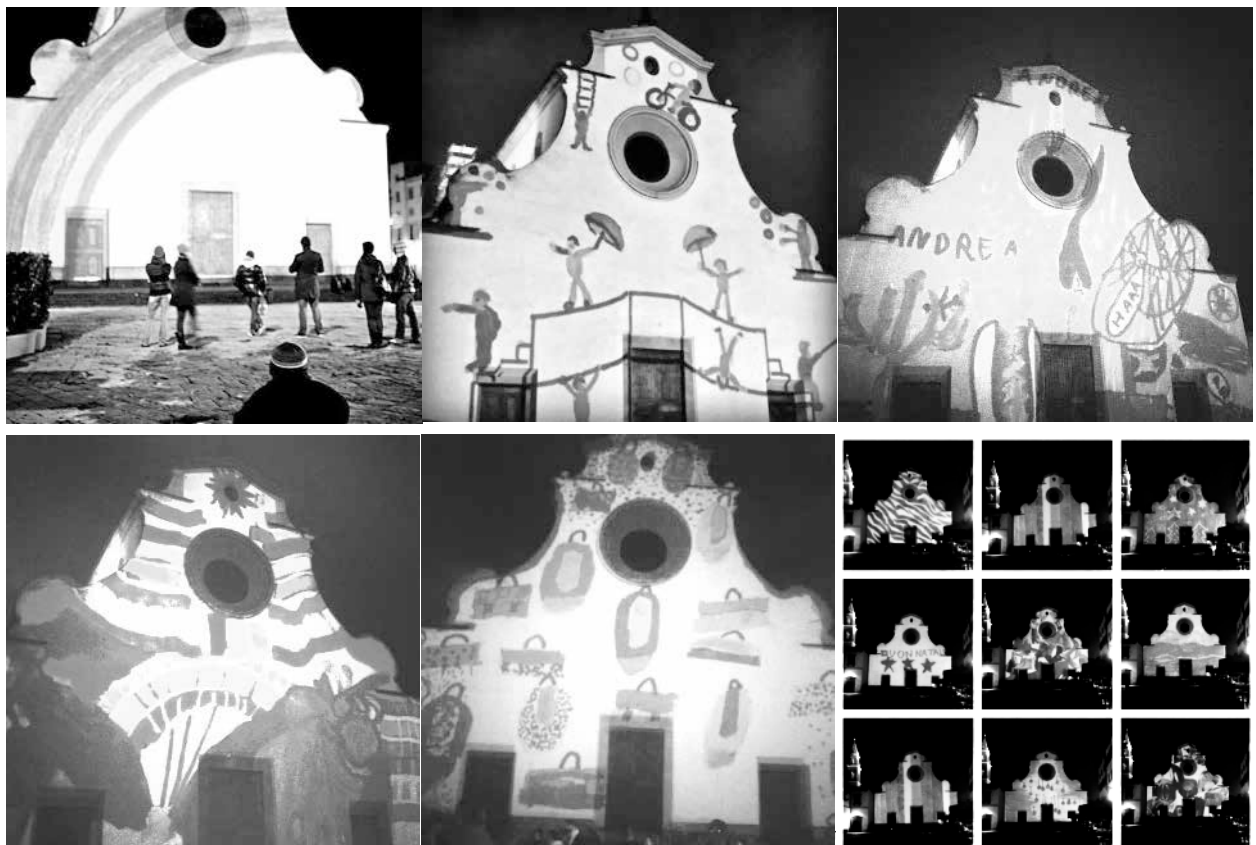
ア・ノヴェッラ広場 (350 m²)、ムラテ (2,500 m²)、中央市場 (5,000 m²) などの公共空間や歴史的遺産を拠点として、様々な光のイベントが開催されている。

F-Light 2014 では、“Beyond Generations” (世代を越えて) をコンセプトに掲げ、市民も子どもも参加できるようなイベントが導入された。子どもたちからオンラインで送られたすべての絵を、速やかにサント・スプリト教会の壁面を利用したプロジェクション・マッピングで投影するイベントである。多数の絵が毎日届き、観光客だけではなく、市民からも、非常に感動的で思慮深い、魅力的なイベントという評価が得られた。今後は他市との連携を実現することも考えているという。

昨年の F-Light 2015 は、国際連合総会第 68 会期 (2013 年 12 月) において、2015 年を光技術の革新によって様々なチャレンジが進んだ国際光年 (IYL2015) とすることが宣言されたことを受け、「F-Light 2015 光とともに」というコンセプトに基づき開催された。

市内のあらゆる場所の公共空間や歴史遺産で様々な光のイベントが行われるが、F-Light では、このような統一コンセプトに基づき、アート・ディレクターによってすべてのイベントが美しく調和するようにマネージされている。

図7 サント・スプリト教会の壁面(正面)を用いた子どもの絵のプロジェクション・マッピング



(資料) F-Light 2014 資料抜粋。このプロジェクションは、European Design Institute (IED), <http://www.ied.it> の協力による。

図8 市内の広場や通りにおける美しく落ち着いた光の演出



(資料) F-Light 2012 案内より。右下はストリートの景観を保ち、たたずまいを演出する公共照明器具。

2—創造都市ボローニャにおける公共空間利用の取り組み

ボローニャ市はイタリアの中央部北側に位置するエミリア・ロマーニャ州の州都であり、市人口は先に訪れたフィレンツェよりやや多く 37 万人を超えているが、横ばい傾向にある。イタリアの産業の特徴は専門に特化した高度技術を持つ中小企業が集積していることであるが、ボローニャも中小企業がネットワークを形成し、地域経済の活力を保持してきた都市である。

訪問先のボローニャ・アーバンセンター (<http://www.urbancenterbologna.it/en/>)⁽⁴⁾の Giovanni Ginocchini 館長によれば、ボローニャは市民力が強く、世界でもいち早く「創造都市」の概念を提唱し、まちづくりにおいても常にイノベーションに取り組んできた都市である。総合大学としては世界最古のボローニャ大学があり、1年で 8 万人の市民が入れ替わる若者の力に満ちた都市である。

以下では、Ginocchini 館長から紹介されたまちづくり事業のうち、歴史的な旧市街地における 2 つの事業事例と、ボローニャ市の都市経済発展部テリトリー促進・部門間プロジェクト調整室の Giorgina Boldrini 女史が中心となって展開している、公共⁽⁵⁾の空家や空床、店舗、空地等の再活用

(4) アーバンセンターは市が運営しているコミュニティ活動やまちづくり活動のための場である。ミラノなどにも同様のセンターがある。

(5) 市所有の空家や店舗等の施設、空地には、税の滞納などの事情によって物納されたり、収用されたりしたものや、市が出資して建設したショッピングセンターなどの空床や政策的に市が買い取った施設や土地などがある。

を推進するインクレディブル（Incredibol）事業について紹介する。いずれも、市民や起業者とともに、市が公共空間や施設の活用についてリーダーシップをとって支援・推進している事業である。

1. T-days 事業

T-days 事業は、世界歴史遺産に登録されているボローニャの旧市街地において市民や来訪者が自由に都市空間を歩き、楽しむことによって中心部の活性化を促そうという事業である。一見、銀座や新宿などの歩行者天国に類似した取り組みだが、既に市の中心部は交通規制ゾーンの指定下であり、1日の交通量が2千台程度まで減少しているところに、さらに、中心部への特殊車両を除く自動車乗り入れ制限を厳しくし、歩行者優先の公共空間をつくるという点で違いがある。

(1) 事業主体

ボローニャ市交通局 (<http://www.comune.bologna.it/trasporti/notizie/2:10507/>)

(2) 対象公共物

市中心部の Rizzoli 通り、Ugo Bassi 通り、Indipendenza 通りの3本の通りとこれらに入る連結部や広場からなる公共区間とエリア。これら3本の通りがT字型になっているため、T-days 事業と名付けられている。

図9 T-days の実施対象地区 (Via Rizzoli, Via Ugo Bassi, Via Indipendenza)



(資料) Bologna Urban Center 資料を加工

(3) 事業概要

① 事業背景

EU が推進する都心政策にしたがって、市の中心部における安全で魅力ある歩行者自由空間の形成を通じて市民と来訪者の回遊を促し、市の活性化を促すことが目的である。

② 事業内容

毎週土曜日の午前8時から日曜日の午後10時まで、中心部のT字型の指定エリアへの自動車乗り入れを原則不可とし、歩行者と自転車だけが通行できるエリアとする。実施にあたっては、2011年2月と9月に試行を行い、2012年2月から社会実験を行いつつ、効果や影響を確認しながら、

同年5月から実施に踏み切り、現時点で定着に至っている。

<http://www.urbancenterbologna.it/nuovo-centro/529-tdays-ogni-weekend>

③事業スキーム

広場や道路、歩道、庭園などの公共施設の質的水準を高めるのと同時に、公共空間利用については、長期利用（Permanent 1年以上）と短期仮利用（Temporary 1年以下）に分けて、ルールづくりを行い、事業者や市民による活用を促進した。

指定エリアに入る通りは、時間が来るとゲートを閉めて自動車の進入を規制する。一部には時間が来ると自動的に進入や退出を規制するライジングボラード⁽⁶⁾を設け、自動的に車の規制を行っている。

(4) 事業評価

実施前に行った近隣住民会議では、地区の約400人の住民から約200の質問と約300の提案を受けている。ウェブには1,700、ブログには2万を超すアクセスがあった。約840人から公開提案に対する意見等を得ており、アーバンセンターのYou Tubeチャンネルを通じて約2,300回のT-daysに関する動画閲覧も行われた。

市がリードをとった事業であるが、住民参加を得ながらの実施であるため、市民からは大好評を得ている。週末には道路ではないまったく別の空間を提供した結果、市民団体による様々なイベントが展開され、にぎわいが形成され、住民が受けるT字型エリアの印象は大きく変わっている。この事業を歓迎してくれたのはファミリー世帯と若い人たちである。

一方で、高齢者からは公共バス等が使えないため不便になったという声がある他、一部の商業者からは常にどこでも同様だが、不便な状況が多いという不平も出ている。

高齢者や障がい者向けには、郊外部から縁辺部、縁辺部同士を回遊できるような公共交通網を新設し、利便性改善のための試行を行っている。

この事業が続けられるのは、ボローニャ大学が位置し、地域に若い世代が多いためである。高齢者が多い都市では、今以上に、高齢者の移動に配慮した方法を採用する必要があるとのことである。

(6) ボラード (bollard) は、元々船を岸に繋留するために岸壁に取りつけた杭であるが、現在、道路や広場などに設置して自動車の進入を阻止する目的で設置される。これが時限的に開閉する装置をライジングボラードと呼ぶ。図2の右下の写真を参照。

図 10 T-days 実施エリアの様子やロゴ、市民の活動状況など



(資料) Bologna Urban Center Presentation 及び筆者撮影

2. 小さな路のプロジェクト

小さな路のプロジェクトは、非営利組織がコミュニティ活動のために、路上駐車空間などの公共空間を活用している事業である。市は、公共空間を市民活動利用のために認可し、情報提供を行うことによって、このプロジェクトを支援している。

(1) 事業主体

事業主体は、Association “Centotrecento”という 2010 年に若い建築家 3 名が立ち上げた社会活動非営利組織である。活動を開始した通りの名前がチェントレチェント通りであることと、3 人で 100%を超えるということから Cento-tre-cento と名付けられている (<http://www.centotrecento.it/>)。

(2) 対象公共物

道路、特に路上駐車帯や広場などの公共空間及びポルティコ⁽⁷⁾下などの準公共空間。

(3) 事業概要

① 背景

住民同士の交流が希薄になり地域としての力が落ち、疲弊し始めたコミュニティの中で、お互いに地域の空間をシェアするという文化をひろめ、居心地を高めることで、コミュニティの再生を目指す試みである。多くの出会いの場と機会を創出することが Centotrecento の活動目的である。活動のための 3 つのビジョンは、(a) 市民同士を結びつけること、(b) 中間支援団体として、行政と市民との関係を仲立ちすること、(c) このための公共空間利用の促進であり、参加型ワークショップにコミュニティ内の公共空間を使うこととしている。

② 事業内容

文化的で楽しめる小さなイベントを開催するなど、市民の少しずつの参加と協働を通じてコミュニティの強化を図り、歴史的建物の維持管理等も含めた難しい課題に取り組めるようにする。小路に面する店舗を含め、市民にとって便利な空間をつくる。

具体的には 2 台分の路上駐車スペースの利用を市に認めてもらい、飲食による交流や学習の機会を設けるなど、徐々にできることから近隣の交流を進めている。

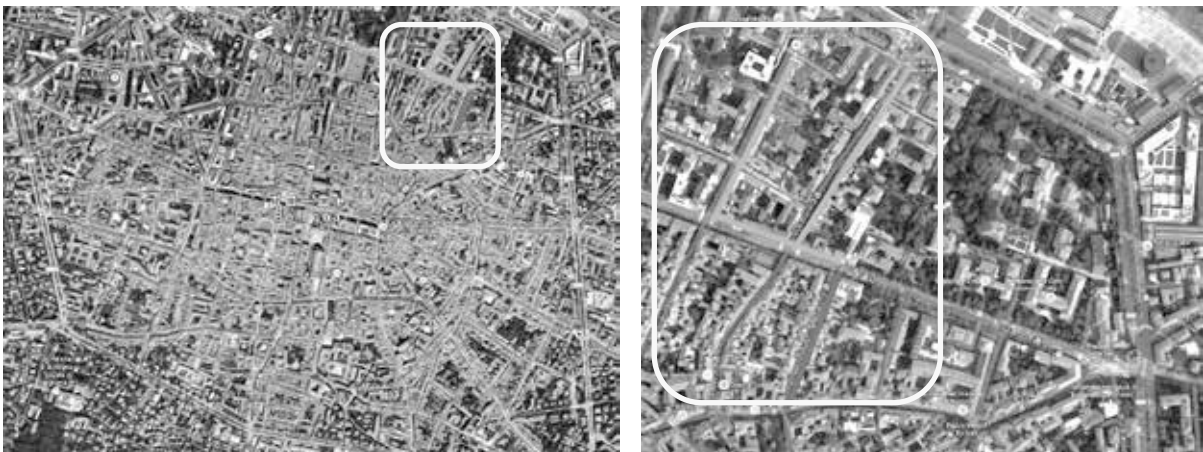
③ 事業スキーム

路上駐車帯や歩道、広場、ポルティコ下などの公共空間利用の認可を市から取得し、テーブルや椅子、白板等の用具を持ち込み、コミュニティの場に一時的に転換して活用する。

(4) 事業評価

当初は Centotrecento による試行でしかなかったが、今では既に 1 年近く継続する事業となり、活動範囲は徐々に広がっている。住民等が自発的に行う活動も増加し、さらに他地区にまで住民主導による同様の活動が広がっており、ボローニャ市内の小路に新たな価値を与えつつある。

図 11 小さな路のプロジェクトの事業エリア



(注) 赤線は当初のプロジェクト対象通り。黄緑線はその後に拡大した通り（大まかに図示）。

(資料) Bologna Urban Center Presentation

(7) ポルティコ (Portico) は、柱で支えられるか壁で囲まれた歩道上に屋根があるポーチである。ボローニャ市内のポルティコの総延長は 40 km ほどで、世界最長水準と言われる。制度上は民間の私有財産だが、ポルティコ下の歩道空間などは公共空間として取り扱われており、所有者であっても、占有利用するには市等の認可取得が必要である。

図 12 小さな路のプロジェクトの活動風景



(資料) Bologna Urban Center Presentation

3. インクレディブル事業

高齢化や景気後退による空家や空地、空店舗などの増加に伴うコミュニティの衰退への有効な対応策はわが国でも喫緊の政策課題である。ボローニャ市にて、実際に公共の空家や施設の再利用に向けた取り組みを行う Giorgina Boldrini 女史のお話を聞くことができたので報告する。

(1) 事業主体

ボローニャ市の都市経済発展部テリトリー促進・部門間プロジェクト調整室

(2) 対象公共物

市が所有している空家や店舗等の施設及び空地。

(3) 事業概要

① 背景

近年の景気悪化により市所有不動産の空家や空店舗等が増え、この再有効活用が課題であった。一方、世界に冠たる文化芸術産業を発展させるため、長期的に文化創造事業を下支えする後継者や起業家を育成する必要があるとあり、芸術家や若い起業家への支援が課題となっていた。この2つを解決する方策として、インクレディブル（「すごい」というような語彙）事業が促進されることとなった。最終的には、市が所有する公共の空家や施設を、文化創造事業の起業拠点として最大限に活用することによって、地域経済の発展を支援することが目的である。

② 事業内容

文化創造事業を起業したいグループからの提案を公募し、審査の上、採択した提案に対し、起業に必要な支援策を講じる。

③ 事業スキーム

採択された起業家は、事務所・スタジオ・工房などに使える市所有の空家等を最大4年間無償で借り受けることができる（電気代等ユーティリティや修繕費用は起業家負担）。あるいは、起業費

用として最大1万ユーロの補助を受けることができる。その他、市の斡旋により、弁護士や会計士、コンサルタントサービスなども無償で受けられる（これらの専門業者は起業家の将来の成長を期待し、無償で起業家を支援する仕組みとなっている）。必要に応じて、宣伝等のプロモーションについても市が支援する。詳細は、<http://www.incredibol.net> を参照。

(4) 事業評価

市は2010年から2015年現在までの公募に対し446提案を受領しており、起業意欲と本事業に対する需要は強いとみている。このうち62事業を採択し、最終的に24起業家を支援した。現状では約半数以上の起業家が成功し、支援がなくても自ら事業を展開できるだけの力量を発揮するようになった。こうした起業家の中には引き続き、支援を受けていた場所を有償で賃貸するものもいれば、活動水準に合わせて他の物件に移転するものもいる。支援を行った起業家が446提案中5%程度というのは、少ないという声もあるが、この種の事業は容易ではなく、きめ細やかさと忍耐が要求されることが分かっていたため、ボローニャ市としては、希望に満ちた成果と考えており、起業意欲を喚起しつつ、今後も着実に推進する方針である。

図13 スペース事例(左:従前、右:従後)



図14 スペース事例(現状)



(資料) 図13及び図14: Bologna Urban Center Presentation

図 15 スペース事例

(修復中)

(現状)



(資料) Bologna Urban Center Presentation

4—むすびにかえて～公共のあるべき姿

フィレンツェでは、その他にも公共空間利用事例をみることができたが、その中から特に印象深かった F-Lighting Festival について概要を報告した。民間が個々の商業目的で行うイルミネーションや光のイベントからさらに飛躍し、公共がリードすることによって、都市レベルで調和ある美しい古都の空間を光の芸術で満たし、フィレンツェの市民や観光客を魅了している。旧市街地の歴史遺産は、新しい命を吹き込まれ、誰もが認める付加価値を得ている。公共空間の活用がいかにか都市の価値を高めるのかが強く認識できた訪問であった。

民間事業や市民の参加は当然であるが、これを実現しているのが、市や Silfi 社の強いリーダーシップとアート・ディレクターや照明技術等の専門家による取り組みである。日本の場合、市内の全域をまとめてマネージできるようなアート・ディレクションを行う人材を確保することは大変難しいものと考えられ、公共の役割と責任について改めて考えなければならないと感じた。

ボローニャ市では、市が公共空間の活用をリードする事業として、①旧市街地の道路や広場を歩行者と自転車優先の魅力ある空間として整備する T-days 事業、②路上駐車帯などの公共空間を非営利組織がコミュニティ活性化のために活用することを認可し支援する小さな路のプロジェクト、③空いている公共施設などの空間を起業家への公募と審査を通じて利用させ、支援策を講じることによって、公共施設の再利用を通じた賑わい創出と経済効果、芸術家の育成を同時に行おうとするインクレディブル事業の 3 事例を紹介した。

フィレンツェ及びボローニャのいずれの事例においても、直接的あるいは間接的に民間事業者や専門家の力を最大限に活用しつつ、公共空間を最大限に民間に活用させ、旧市街地における魅力の維持やコミュニティの活性化、空家対策と経済振興を図ろうとする公共的な役割と責任が明確に認識でき、日本の公共のあるべき姿を考える上で大変参考になったと思う。